

棕の道草 第3回 「春の帰省」

市川臺子

春浅し父の叱言を聞きにゆく 郷子（『秋の顔』より）

年一度の高知への帰省は、春。昔は四国山脈を越えるのに大歩危小歩危を、くねくねと8時間から10時間かけての帰省だった。今は、明石から高速道を5時間もあれば休憩しながらでも帰り着く。毎年だが故郷近くの国道沿いには、まだ伸びきっていない柔らかな若草色の露がそよそよと揺らぎ、山水がちよろちよろと音を立てている。摘みたくてたまらない気持ちを振り切って車を走らせる。まずは、道の駅で供花を買う。

私も主人も同じ故郷なので、帰省すれば立寄る所が多くて大変だ。あっちの墓地こっちの墓地と、まずは手を合わすことから始まる。墓までの径は、露の姥がぬきん出て辺りは春の露が清々しく戦いでいる。それはそれは美しい鶯の声に癒やされていると、遠い昔が蘇る。

「土佐の高知のはりまや橋で」と唄われている土佐名物の橋は、少々お粗末。それよりも初鯉である。今はもっぱら近くの仕出し屋に注文するのだが、以前義弟が料ってくれた豪快な鯉のたたきの味は今も忘れられない。庭で藁を燻べでの大胆な自家製の味は格別だった。一切れが口に入りきれない大ききなのだ。こんな美味しい物を日々食べていると皮膚に張りができるだろうと、羨ましく思われた。皿鉢料理がまた絶品である。皿鉢料理には、お猪口と小皿が数枚あればいいので、酒席の用意がとても楽。

初鯉母はか細く唄ひをり 臺子

皆、良く食べ良く喋り良く笑う。私は高知より明石に3倍以上長く住んでいる所為か、もう田舎の生活には戻れないだろうと内心淋しくもある。兄嫁達の話にはついていけない。次から次に話が飛び出て、午前さままで話の花が咲く。

二日間の帰省はあっという間に終る。帰路の車の中で夫とする話に出て来るのは、「家が一番いいね」だ。夫婦共々老いた証拠なんだろう。

年に一度、とびきり美味しい鯉や皿鉢料理に舌鼓を打つのを楽しみに、明石で俳句に没頭する日々が私はなにより幸せである。

父母の墓に、そう報告した春の帰省だった。